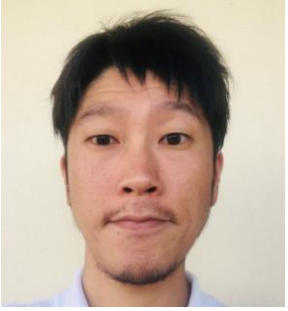
酒井　剛佑さん（広島県坂町出身）
2018 年度 1 次隊　青年海外協力隊
派遣国：ナミビア　職種：小学校教育
2020 年 1 月 12 日（日）中国新聞 SELECT 掲載

※中国新聞社の許諾を得ています



英語での学びを後押し

「グッドモーニング」とあいさつをしてもあまり返事は来ない。現地語で「モロケニ」と言うと、小さな声であいさつを返す子どもたち。初めて任地に来た時は私の想像とは大きく違い、とても驚いたものだった。

キャプション：
算数の授業。黒板の一部を紙で覆い考えを促す

しかしこの村に暮らすようになってその理由が分かった。まず、子どもたちは私のような外国人と話す機会がほとんどない。さらに、英語の勉強をしてはいるが日常生活は全てが現地語のため英語で話すことに自身がない。

私はアフリカの南部にあるナミビア共和国で小学校教諭として活動している。「ンタラコンバインドスクール」という田舎の学校で主に算数の授業や、教員への技術移転（教材開発や使い方の指導、授業の進め方など）を行っている。ナミビアでは小１の前段階から英語の授業を行っており、小４から全ての教科が英語で行われる。

そのため「先生の言っていることが分からない」「問題が読めない」といったことが起こり、学習でつまずく生徒が続出する。授業で使う言葉は短く簡単にし、教材を積極的に用いて視覚から理解しやすいように努めてきた。何度も繰り返すことで自信を付け、自ら答えを発表する生徒も増えてきている。

英語の壁だけでなく、お金や家庭の手伝いといったその他の問題でも退学や留年する子どもが毎年大勢いる。私は帰国するまでにそういった子どもを一人でも減らし、少しでも「分かることは楽しい」と感じてもらえるように努力していきたい。